

キャラクター名
ジェスター・ヴァンデロット

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ		ワークス	傭兵	カヴァー	テンペスト隊員
	キュマイラ					
オプション			年齢	45	性別	男
覚醒	死	衝動	闘争	初期侵食率	34	%
出自	天涯孤独	経験	闘いの日々	邂逅	ディアス・マクレーン	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	33
肉体	5	1	0			6	行動値	3
感覚	1	0	0			1	(非装備時)	3
精神	1	0	0			1	戦闘移動	8
社会	1	0	0			1	全力移動	16

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃	1		RC			交渉		
回避			知覚	1		意志			調達		
運転:	2		芸術:			知識:			情報: 軍事	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
滅びの刃@<100	白兵	6r+1	6	14		攻撃時侵食値+2
滅びの刃@≥100	白兵	6r-1	9	24		攻撃時侵食値+2

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス			
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイマス消費
[HR30] 発明品/マスターピース	P	N	
ディアス・マクレーン	P 連帯感	N 敵愾心	
フィン・ブーストロイド	P 感服	N 憐憫	
	P	N	
	P	N	
	P	N	
	P	N	

最大財産P: 2 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
パワースイング	1	3	メジャー	武器	-	対決	-	
効果: 判定-1D、攻撃力+Lv×3								
イオノクラフト	1	1	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果: 飛行状態で戦闘移動、移動距離+Lv×2m								
フルパワーアタック	3	4	セット	至近	自身	自動	80%	
効果: 攻撃力+Lv×5、行動値0								
雷神の降臨	3	6	セット	至近	自身	自動	100%	
効果: 攻撃力+Lv×5、行動値0								
ポルターガイスト	1	4	マイナー	至近	自身	自動	100%	
効果: 武器をひとつ破壊、シーン間指定武器の攻撃力を加算								
コンセントレイト:キュマイラ	2	2	メジャー	-	-	対決	-	
効果: C値-Lv								
エピック	1							
効果: 武器の攻撃力+4、1回分の破壊耐性、滅びの刃指定								
	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

元マスターエージェントとして単身で米軍とやりあっていた現テンペスト戦闘員。裏社会の住人としてその青春を過ごし、クラブでの銃乱射事件に巻き込まれることでオーヴァードに覚醒。当時としては庄巻の白兵能力と不死身の肉体に感心し、手頃な長物片手に暴れまわっていた。本人は「若気の至りが背中を押しただけの喧嘩」と宣っていたが、オーヴァードと非オーヴァードの戦力差は明らかで、戦闘に飢えていた彼にとってははどれもこれも退屈で、喧嘩を売る相手はみるみるうちに大物になっていった。ダチの敵討ちから始まった闘争はいつしかアメリカ軍まで敵に回す規模にまで広がり、勝手に仲間意識を抱いた一部のFHエージェントたちの援助もあり、彼は原初のマスターエージェントという旗印として担ぎ上げ、アメリカという国家に対して反旗を翻しかけた。しかしながら、コードウエルを筆頭とする発足したてのUGNが調子づいた彼を殺す前に、事態は収束を見られる。事態を重く見た米軍がディアス・マクレーンを筆頭とする「テンペスト」を組織して、彼らの汚名を雪いだことにより、正々堂々対一の勝負でディアスに完敗した彼は、最初で最後の満足のいく戦闘の味を噛みしめながらも死を覚悟した。しかしながらディアス及び米軍は「いまだ戦力の不足が否めないテンペストに敗残兵である彼を入隊させ、先兵として再活用するべきだ」という決断を下した。これらが彼がテンペストの最古参の戦闘員となった経緯である。

若い頃は向こう見ずで本能と衝動に身を任せがちであったが年月の経過とが彼を丸くした。現在ではナイスミドルらしいクレバーさと気性の穏やかさを漂わせており、昔の面影はギラギラとした目つきや痛々しい疵跡だらけの筋骨隆々とした肉体からしか見て取れない。その変化も相まってか入隊当初はどうせ長続きしないと思われた米兵生活はなんだかんだ現在まで続いている。一人が最新鋭のSEALS一小隊に匹敵するほどの戦力を持ち合わせる兵士と毎日戦闘訓練を行えること、「魔術」のようなスリル満点の退屈しない任務が口を開けていけば入ってくる立場、本国のコネからFHに与していた時にすらお目にかかれなかった最強のエモノを最上のメンテナンスがなされた状態で振るえることの心地よさ。いまだ勝ち越せていない好敵手の存在とその理由には事欠かないだろう。ダウントン上りの元FH戦闘員であるため、米軍の中では年齢の割に階級が異様に低く、二回り歳が下の相手に敬語を使う機会もしばしばだが、そんなことは何も気にならないらしい。

唯一代わっていないのは彼の戦闘スタイルだけだ。もうぶっ壊れていいという気概で、馬鹿力任せにエモノを振るう。荒々しく乱雑に振るわれた刀を次第に研がれ、血飛沫を取り込むことでその鋭さを増していく。そうして相手が壊れるまで、必殺の一撃を何度も何度も何度も何度も振り下ろす。どちらが先にぶっ壊れるか、根競べと行こうじゃねえか。この口癖も、変わってはいなかったか。